

# 授乳に関する母親の価値観に影響を与えた情報源と力

井関 敦子<sup>1</sup>, 南田 智子<sup>1</sup>, 白井 瑞子<sup>2</sup>

## Abstract

It is reported in the present paper that a survey study was made to nine mothers about one month later after their first baby deliveries. The survey study was performed in each subject by interview, namely:

①desired nursing method, ②the person given a influences in the process of continuation or abandonment of breastfeeding, and ③content and acceptance of information.

The findings are as follows: all of these mothers desire their breast feeding, and the persons influencing on their values to nursing and/or breast milk are many of nurses and real mothers, and followed by mothers' friends and acquaintances and subsequently by magazines and books. It was supposed that The formers were motivated to keep their own desires so as to give breastfeeding to their babies by influence through the health guidance from nurses and their lactation experiences and values from the real mothers.

**Key Words:** Values, Breastfeeding, Influences

## I. はじめに

個人が何をもって理想的育児とするかは、時代背景や社会の価値観の影響を受けるものである。乳児の栄養方法に視点をあてると、母乳育児は1960年代に始まる高度成長期においては時代遅れと見なされ、人工栄養での育児がファッションと考えられていた。そして人工栄養による事故（森永砒素ミルク事件）への反省やアレルギー問題への注目から、1980年頃より母乳育児の再評価がされ初めた。現在はWHO/UNICEF、政府主導の結果として、母乳が新生児にとって理想的な栄養源であることは周知の事実として認識されるに至っている。

1950年代には、生後1ヶ月児の母乳栄養率は90%を超えていた。しかし、乳幼児栄養調査<sup>1)</sup>によると1ヶ月時点での母乳栄養率は1990年44.1%、1995年46.2%、2000年44.8%と、40%台に留まり、それ以上の回復は見られない。妊婦あるいは分娩直後女性の80~90%は母乳育児を望んでいる<sup>2) 3)</sup>。また人がある考えを持つには何らかの社会的影響力が働くとされる<sup>4)</sup>。

しかし、母乳育児を望む現代の母親が、新生児・乳児の栄養方法を意思決定する場面において、どのような人からの影響を受けているのか、あるいは自分自身の意志確認を行っているかを明らかにした文献を見出すことは出来なかった。

初めて母親になる女性にとって、妊娠期は親役割受け入れの準備期である。また産褥期は、母親としての役割移行が現実のものとして目前にあるが、心身の疲労が蓄積しており依存要求が高いと考える。したがって身近な人の言葉や態度により容易に影響を受け、自らの意思を貫き通すパワーは減少していると考えられる。産褥期にある女性がパワーレスに陥ることなく母乳育児を選択し継続できるようにサポートすることは有意義な活動である。

そこで本研究では、初めて母親になる女性が、妊娠期あるいは産褥期に、母乳育児を決心、あるいは継続する心理プロセスを解明し、出産準備教育の内容検討に有用な資料を得ることを目的に、研究に着手した。

1. 三重大学医学部看護学科 母子看護学講座  
2. 香川大学医学部看護学科 地域・精神看護学講座

## II. 目的

第1子を分娩した母親が、母乳育児を決心、あるいは継続する過程で関わりがあった人物（母親自身の意思決定を含む）から受けた影響の内容と、影響力を明らかにする。そしてそこから母乳育児支援への示唆を得る。

## III. 研究方法

### 1. 対象者

正期産で第1子を分娩後、母子ともに母乳育児が禁忌ではない条件下で、約1ヶ月経過した母親とした。

### 2. 調査期間・調査施設

調査期間：平成16年9月から平成17年2月

調査施設：中部圏内の公立病院の産科小児科外来

調査施設の特徴：母乳外来を有し、妊娠中・分娩後・退院後も継続し母乳育児支援を行っている。入院中はSMCマッサージを取り入れ、希望者や条件が整った場合は選択的に母子同室制を採用している。

調査場面：1か月健診来院時の待ち時間や健診終了後に、授乳室や外来の一角を利用し面接を行った。面接の障害となるような騒音などはなかった。

### 3. 調査方法・内容

調査方法や内容の適切性を確保するために、プレテストを行った。本調査では1ヶ月健診に来院時、調査カードを用いた構成的面接法と半構成的面接法で質問を行い、許可を得てテープレコーダーに採録した。インタビューガイドを作成し、①希望した授乳方法、②母乳育児の継続あるいは断念の過程に影響を受けた人物、③情報の内容と受けとめについて面接を行った。産褥1ヶ月時期の疲労や睡眠不足に伴う健忘状態を考慮し、対象者の想起を助けるために調査カードを用いた。具体的な調査手順は以下のとおりである。

#### 1) 希望した授乳方法

問いかけは「赤ちゃんを育てるには母乳やミルクがありますが、妊娠中から出産後、どちらの方法で育てたいと考えていましたか。それはどの程度ですか。」とし、回答は「①絶対に母乳で ②できれば母乳で ③どちらでも良い ④できればミルクで ⑤絶対にミルクで」を明記した調査カードを提示した。

#### 2) 母乳育児の継続あるいは断念の過程に影響を受けた人物

問いかけは「ご自分の授乳方針や母乳育児に対する考え方に影響を受けた人がいますか。影響が大きかっ

たもの上位2つを選んでください。」とし、「①実母 ②夫の母 ③夫 ④姉妹・義理の姉妹 ⑤医師 ⑥看護職（看護師・助産師）⑦友人 ⑧雑誌・本（の著者）」を明記した調査カードを提示した。

3) 情報の内容（影響を受けた事柄・言葉）と受けとめ  
問いかけは「影響を受けたその方たちは、どんなことを言っていましたか。」とした。

#### 4. 倫理面への配慮

施設長より了承を得た後、入院中と1ヶ月健診時に説明を行い、署名を得た。説明の内容は、研究の目的・方法、匿名性の保証、研究対象者の権利等に関するものであった。

#### 5. 分析方法

面接内容を逐語録として再生し内容分析を行った。分析は共同研究者間で妥当であるかを吟味し信頼性を確保した。影響を受けた人と、その内容に関しては、FrenchとRavenによる影響力の分類（5種類）を使用した<sup>4)</sup>。

#### 6. 用語の定義

母親：第1子を分娩した女性

実母：第1子を分娩した女性（母親）の実母

FrenchとRavenによる社会的影響力（5分類）：

- 1) 賞影響力：与え手からの働きかけに応じるにより、何らかの賞が受け手に与えられる時に生じる力
- 2) 罰影響力：与え手からの働きかけに応じない場合、何らかの罰が受け手に与えられる時に生じる力
- 3) 正当影響力：与え手が受け手よりも地位が強い立場にある場合に生じる力
- 4) 参照影響力：与え手が受け手に対して理想像になっている場合に生じる力
- 5) 専門影響力：与え手がある領域において人よりも多くの専門的知識や技能を身に付けている場合に生じる力

## IV. 結果

### 1. 対象者の背景

調査協力者9名の背景を表1に示す。年齢は平均27.2歳、就業状態は無職（主婦）が7名有職（育児休業）が2名であった。分娩様式は7名が経膈分娩、2名が帝王切開であった。児の生下時体重は平均2,747gであった。1ヶ月健診時点での授乳方法は母乳栄養5名、混合栄養4名であった。退院後の主たる援助者は全員が実母であった。

表1 研究対象者の背景

事例番号	年齢 (歳)	就業状態	分娩様式	児の生下時 体重 (g)	1ヶ月健診時 の授乳方法	退院後の主な 支援者
事例1	34	有職 (育児休業)	経膈分娩	3,390	母乳栄養	実母
事例2	42	有職 (育児休業)	帝王切開	2,950	混合栄養	実母
事例3	29	無職 (主婦)	経膈分娩	2,655	母乳栄養	実母
事例4	27	無職 (主婦)	帝王切開	2,460	母乳栄養	実母
事例5	35	無職 (主婦)	経膈分娩	3,230	混合栄養	実母
事例6	33	無職 (主婦)	経膈分娩	3,590	混合栄養	実母
事例7	21	無職 (主婦)	経膈分娩	2,930	母乳栄養	実母
事例8	36	無職 (主婦)	経膈分娩	3,170	混合栄養	実母
事例9	23	有職 (育児休業)	経膈分娩	3,440	母乳栄養	実母
平均/ 合計	27.2	無職 (主婦) 6 有職 (育児休業) 3	経膈分娩 7 帝王切開 2	2,747	母乳栄養 5 混合栄養 4	実母 9

## 2. 面接内容

面接時間は最短 20 分、最長 90 分であった。9 事例から得られた面接結果を表 2 に示す。

### 1) 希望した授乳方法

全体を概観し分娩後に焦点をあてると、全員が母乳育児の意志を示していた。しかし 4 事例は哺乳に対する気持ちが流動的であった。事例 2, 8 は、妊娠中から分娩後、看護職からの保健指導を受け、入院中に他の褥婦の授乳に取り組む様子を見たり、看護職から支援を受けることで「どちらでもいい」から、「出来れば母乳で」あるいは「母乳だけでいけたら」と変化していた。事例 9 は実母からの助言で、はじめの 2, 3 ヶ月だけでなく以降も母乳を続けることを述べていた。また事例 6 は「退院の頃は母乳も良く出たので、絶対に母乳でと思ったが、今は出るなら母乳で」など、泌乳状態に沿って気持ちに変化したことを述べていた。

### 2) 母乳育児の継続あるいは断念の過程に影響を受けた人物

授乳方法・母乳への価値観に影響を受けたものとして、「看護職」が 6 名、「実母」が 6 名、「友人」が 2 名、「その他 (褥婦)・看護職」が 1 名、「雑誌・本 (の著者)」が 2 名であった。また、事例 5 は「自分の考え」が一番強く、あえて答えるなら「看護職」と答えた。また上位 2 位としてはあげられなかったが、義母にも 3 名がふれていた。

### 3) 情報の内容と受け止め

対象者の具体的発言内容を ( ) に、抽象度を上げたものを【 】に示す。情報源である看護職、実母、友人、本・雑誌のいずれからも【母乳のメリット】があげられた。

#### ①看護職からの情報

【母乳のメリット】「おっぱいが赤ちゃんには一番

だと。」「母親の体重がへる、子宮の回復が早い、赤ちゃんにも…って病院で聞いて。」

【専門家による保健指導】「専門の方が言われたこと聞いといた方が一番かなと。」「3 回の母親教室や両親学級で言われたのは大きいですね。」

【母乳育児という病院の方針】「病院での指導があって、その続きのことですから。」「ここは母乳の病院だから、洗脳されたみたい。母乳でないといけなかなーって思いました。」

【病室の授乳室】「授乳室だと母乳やるのが普通の流れで、母乳だからいいとかが普通の流れで。」「みんな母乳で時間かけて一生懸命やってるし、看護婦さんが励ましてくれる姿とか見て。」「この病院は母乳マッサージとかやってるし、そこから、早く母乳が出るんやったら育てたいなって。」

#### ②実母からの情報

【母乳のメリット】「母乳が一番ええよと。」「お乳が一番よ、自分が楽やし。ミルク作ったりそんなんより、おっぱいペローンと出せば済むし、自分のためにも赤ちゃんのためにも母乳が一番いいからって。」「病気にならないとか聞いたし。」「母乳の方が、栄養があるとか、赤ちゃんが病気にしにくいとか。」

【母乳を与えられなかった実母】「自分はあげたくても出やなかったんで、出るもんなら母乳であげたほうがええよと。」

【母乳で苦労した実母】「私を育てる時は母乳オンリーでミルクを飲まなかったらしいですけどね。でも出すために苦労したみたいですよ。」「母は母乳が途中で出なくなって私がミルクを飲まなくて、それが一番育児で苦労したみたいで、おっぱいが出ないことが。」

【母乳を与えた (と私が思う) 実母】「母がたぶん

表2 面接結果

事例番号	希望する栄養方法・理由	情報源	受けた情報の内容・受け止め
事例1	できれば母乳で。理由は特に無い。	①実母	母乳が一番ええよと。自分はあげたくても出やなかったの、出るもんなら母乳であげたほうがええよと。
		②看護職	お母さんのおっぱいが赤ちゃんには一番いいからって…。
事例2	すくすく育てば何でもいいと。でもできれば母乳かな。	①看護職	母親教室や両親学級でも言われたので、影響は強いです。3回の母親教室や両親学級でも言われたのは大きいですね。この病院は母乳母乳の病院なので洗脳されて母乳でないといけないのかなと思った。母乳が出ないのはそんなにいかんことかなと。
		②実母	お乳が一番よ、自分が楽やし。ミルク作ったりそんなんより、おっぱいペローンと出せば済むし、自分のためにも赤ちゃんのためにも母乳が一番いいからって。私を育てる時は母乳オンリーでミルクを飲まなかったらしいですけどね。でも出すために苦勞したみたいですよ。母が「足らんと違うの。」って言うからミルク足したけど、母乳外来に来たら、倍くらいやってみたいで。あれはちょっと有難迷惑。
事例3	出来れば母乳。アレルギー、経済的理由。	①友人	母乳がいいよーなんて話はないけど、いらんもんが増えないとか。体験談だし。4、5人やってきていっせいに母乳飲ませるから、一丁あがり一みみたいな感じで。
		②看護職	情報得られず
事例4	できれば母乳で。母乳に固執するとプレッシャーになるかなと、できたらぐらいに思ってた。母が母乳が出なかったことがかなり影響あったので。	①友人	友達はカチカチのおっぱいをマッサージしてもらえなかったとか、薬で出ない様にされたとか。あげたかったんだと思ったら、後で後悔したくないと思って。母乳は楽で、消毒いらぬ、欲しがるときにあげられるからと。初乳はあげたほうがいいとか。義母もそう言っていました。
		②実母	母は母乳が途中で出なくなって私がミルクを飲まなくて、それが一番育児で苦勞したみたいで。おっぱいが出ないことが。
事例5	母乳をあげたいというよりも、ふつうは母乳で、当たり前だと思うから。何も考えてなかった。自分の考えが一番です。	①無し	赤ちゃんはおっぱい飲んで育つんだと思ってたから。
		②看護職 (授乳室)	それで選んだ訳じゃないけど、〇〇病院は母乳でやってるじゃないですか。病院での指導の続きでやっていることなので。授乳室だと母乳やるのが普通の流れで、母乳だからいいとかが普通の流れで。
事例6	退院の頃は母乳も良く出たので、母乳だけでいけると思ったので、始めはミルクなしで絶対母乳でって思ったんですが。	①看護職	一番は助産婦さんかな。母親教室行ったり、専門の方が言われたこと聞いた方が一番かなと。
		②実母	母がたぶん母乳だったと思うんですね。「あんたらに吸われたからこんなに小さくなった。」とか言っていましたから。私が思う限りですけど。病気になるか聞いたし。母は「ミルク足した方がいいんじゃないの？諦めて。」と。絶対母乳で行きたかったんですけど、やっぱり親とか上の方が言うことも正しいので。向こうの母(義母)は「母乳の味を覚えてミルクを飲まなくなるから、ミルクをあげたほうがいい。あげないと自分が大変。ミルク飲まなかったら預けられないから。」と。
事例7	できれば母乳で。病院でいいと聞いたので。	①看護職 (授乳室)	体重が減る、子宮の回復が早い、赤ちゃんの方にも・って病院で聞いて。それにこの病院は母乳マッサージやってるし、そこから。早く母乳が出るんやったら育てたいなって。
		②実母	赤ちゃんや自分にもいいと言うので。
事例8	初めは混合でと思ってましたが、生まれてから、母乳だけでいけたらと変わりました。自分が楽かと。番号はつけられない。	①雑誌・本	免疫があると子宮の戻りがいいとか。
		①その他(褥婦・看護職)	みんな母乳で一生懸命時間かけてやってたので、あれからいいと・・・頑張ってるし、看護婦さんも励ましてくれるその姿とか見て
事例9	初めの1、2ヶ月は絶対母乳で、その後はミルクでと。煙草を吸いたかったので、1、2ヶ月なら我慢できるかと。	①実母	母乳の方が、栄養があるとか、赤ちゃんが病気にしにくいとか。でも母から、「ずっと母乳にしなさい。」と言われたので。義母からも「もちろん母乳よね。」と言われたので、「はいっ。」って感じで。
		②雑誌・本	母乳がいいと書いてあったので。

母乳だったと思うんですね。『あんたらに吸われたからこんなに小さくなった』とか言っていましたから、私が思う限りですけど。」

【実母の言うことに従う】「(2, 3ヶ月経ったらミルクでとを考えていたが)でもずっと母乳にきなさいと言われたので。」

「母が『足らんと違うの?』って言うからミルクを足したけど、有難迷惑」「やっぱり親とか上の方が言うことも正しいので。」

### ③友人からの情報

【母乳を与えられず後悔したくない】「友達はカチカチのおっぱいをマッサージしてもらえなかったとか、薬で出ない様にされたとか、あげたかったんだと思ったら、後で後悔したくないと思って。」

【直接見聞きした母乳育児】「体験談だし、4, 5人やってきていっせいに母乳飲ませるから、一丁あがり～みたいな感じで。」

【母乳のメリット】「母乳は楽で、消毒いらさない、欲しがるときにあげられるからと、初乳はあげたほうがいいとか。」「母乳がいいよーなんて話はないけど、いらんもんが増えないとか。」

### ④雑誌・本（の著者）からの情報

【母乳のメリット】「免疫がある、子宮の戻りがいいとか。」「母乳がいいと書いてありました。」

## V. 考 察

### 1. 希望した授乳方法

対象者は自分の意志と、看護職や実母などから影響を受け、全員が母乳哺育を希望していた。しかし、その程度は「できれば母乳で」と、消極的母乳栄養希望者が多かった。

初めての妊娠や出産を迎えた母親には、母乳に対す

るイメージができていないことの他に、現実問題として“母乳哺育で負担を感じたくない、外出先で授乳ができる場所がない、職場に授乳室がない”といった、母乳哺育に対する心理的、社会的困難さがある。母乳哺育に関する世界規模での活動として、WHO/UNICEFは「母乳育児を成功させるための10か条」を実践する施設をBFH (Baby Friendly Hospital: 赤ちゃんにやさしい病院)として認定している。しかし2005年現在、日本でのBFH認定施設は40に過ぎず、他の先進国と比較しても少なく(2001年: ドイツ産科施設数1,000対BFH11, イギリス産科施設数300対BFH32)<sup>3)</sup>、母乳代替品の入手も利用も容易である。以上のことから、鎌田ら<sup>5)</sup>が「乳児には母乳しかないとする事情が、心理的にも現実的にも崩れた」としているように、「絶対に母乳で」とする理由が、今の日本社会にも母親の意識の上でも乏しいことが推察される。

### 2. 影響を受けた人物と情報の内容

母親達は、看護職、実母、友人、雑誌・本（の著者）から影響を受けていた。また入院中の褥婦や義理の母にもふれていた。影響を受けた情報源からの内容として多くの母親が【母乳のメリット】をあげていた。

今井は<sup>4)</sup>、「受け手の反応を左右する要因として、影響の与え手は、受け手にとってどのような存在であるのか、どのような特長や性質を持っているかが重要である。」と述べている。そこで本研究では母親が受けた影響力はどのような種類で、影響を与えたものはどのような意味を持つ存在であったかを、FrenchとRavenによる社会的影響力とレヴィンの集団力学(グループダイナミクス)理論を参考に検討した。図1に影響を受けた情報源と影響力の関係を図示する。

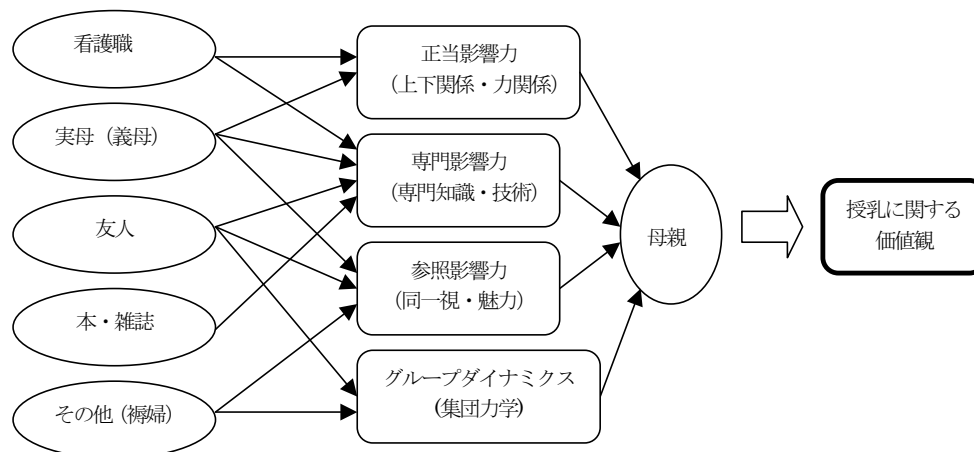


図1 母親が影響を受けた情報源と力

## 1) 専門影響力

### ①看護職

「専門影響力」とはその分野において人よりも豊富な専門的知識や技能を持った人からの影響である。母親にとって看護職は、周産期医療の知識を持ち、専門教育を受けた信頼できるスペシャリストである。「専門家が言うこと」「保健指導で言われた」「母乳の方針の病院」と看護職が説く母乳のメリットや乳房ケアは、説得力を持って受け止められており、看護職による支援は大きな影響力を持っていると考えられた。

### ②実母

実母は【母乳のメリット】や、自分の授乳体験を通じて【母乳を与えられなかった】【母乳で苦労した】ということを母親に話していた。実母は育児経験や授乳経験があるという意味では、「専門影響力」を持っていると考えられる。しかし実母が育児を経験したのは、今から約20年から40年前の1965年から1985年に相当し、これは日本が人工栄養志向であった時期である。永山<sup>2)</sup>は、戦後の約40～50年間、育児書も医療者の教科書も含めて、日本は人工栄養志向の社会であったと述べている。また松原<sup>6)</sup>は「周囲に母乳育児経験者がいないことは、母乳支援環境として大変不利な状況である。泣けばミルクと哺乳瓶を持ってきてくれる母親や姑の姿勢は母乳育児をくじかせる大きな要因となる。」と述べている。実母は授乳経験があるという意味において「専門影響力」を有する。しかし、十分な母乳育児支援を受けていない可能性があることに加えて、医療職による母乳支援の方法と差異があることも考えられる。

### ③友人、雑誌・本（の著者）

母親は友人や雑誌・本（の著者）から【母乳のメリット】や【直接見聞きした母乳育児】という情報を得ていた。丹羽<sup>7)</sup>は、「育児中の母親達の相談相手として最も多いものが、近所の友人ママである。」と述べているように、友人は同世代でものごとに対する価値観や感覚が近い、身近で有力な、具体的情報の提供者である。友人の授乳体験は、自分よりも先に授乳を体験した経験豊富な人からの「専門影響力」であると考えられる。また柳川<sup>9)</sup>は母親たちへの調査の中で、妊娠・出産・育児に関して強く影響を受けたものとして一位に「育児雑誌・育児書」と報告している。育児雑誌・本は、授乳という未知の世界に関する専門的知識を提供してくれる媒体である。しかし、実母や友人からの情報は生き生きとしたインパクトの強いものであることは対照的に、本・

雑誌（の著者）から受けた情報に関する母親の発言内容は表面的で、そこに母親自分の解釈や思いは少ない。

## 2) 正当影響力

### ①実母

「正当影響力」は、自分より年齢が上、社会的地位が高いなど、親子、先輩後輩、上司部下、教師生徒という関係の中で生じる。対象者は退院後、全員が実母から産後のサポートを受けていた。母親は、実母からの具体的支援の他に、「母（実母）が言ったから」と実母の持つ力が示唆されることを述べていた。現代の日本では親が子に対して持つ力は弱体化しているものの、退院後実母から支援を与える側と、受ける側という立場では、上下関係が生じていることも推察できる。北村<sup>9)</sup>は「(娘は)妊娠中の不安についての相談、育児に対する相談などに関して実の母親は夫と同等かそれ以上に頼りにされる。」としている。産褥期は非常に依存的な時期であるが、本研究の調査時期は産後1か月時点という、実母の支援が継続している時期にあたる。初めて子どもを生んだ母親にとって授乳は未知の世界で、育児経験者である実母は大きな存在感を持つ、頼るべき存在であることより、実母から「正当影響力」が働いていると考えられる。

### ②看護職・病院

調査対象となった施設は、妊娠中から退院後も継続して母乳育児支援を行っている病院である。事例5, 6は【専門家による保健指導】と【母乳育児という病院の方針】について、また事例2は「病院の方針からの洗脳」と「母乳の勧めに対する軽度の違和感」を述べていた。そこからは病院という組織とそこに属する看護職という強い影響力の存在が推察される。そしてサービスの与え手である看護者-受け手である患者という力関係も存在する。また母親は病院における患者役割を担っているため、ここには「正当影響力」が働いていると考えられる。

## 3) 参照影響力

### ①実母

事例1, 2, 4は、実母の授乳経験から【母乳を与えられなかった実母】【母乳で苦労した実母】について述べ、実母の気持ちを慮り労っていた。また事例4は、「実母の授乳の苦労話が自分の授乳方針に与えた影響」について述べていた。

「参照影響力」について、今井<sup>4)</sup>は「影響の与え手が受け手の理想像になっている場合に生じ、子どもが同性の親に同一視することもある。」と説明している。Rubin<sup>10)</sup>が母娘関係について「(妊娠した)

娘と母との接触は増加し、訪問や電話の回数も増加する」と述べているように、初めて妊娠した女性は、実母にも妊娠を告げ頼りにする。実母との関係を密にし、自分と実母を同一視することで、妊娠期における母親役割獲得を模索しているとも言える。さらに Rubin<sup>10)</sup> は「実の母親は熟練していることがよくわかっていることから最も力強いモデルである。…(中略) とくに予測ということでは、女性自身の母親の経験が主なモデルとされる。」と述べている。母乳育児を目指す母親にとって実母の授乳体験はモデルとなり、子どものために苦勞する母は、ある意味理想的な母親像でもある。実母の母乳育児が成功しても不成功であっても、母親達は実母の授乳経験や思いを自分なりに解釈し、自分と実母を同一視して泌乳を予測し、自分が母乳育児を行う理由として取り込んでいると考えられる。「実母の母乳育児体験」は、実母と自分を同一視した母親の、母乳育児の動機づけになり、また強化する因子となっていると推察される。北村ら<sup>9)</sup> は「多くの場合、母親と娘のポジティブな関係(親密性)が母娘双方の適応状態のよさと関連している。」と述べている。少子時代の母子密着が「友達親子」という言葉で比喻される昨今、母と実母の関係が良好であればなおさら、「参照影響力」は大きいと考えられる。

#### ②その他(褥婦・看護職)、友人

事例8は【病院の授乳室】について、事例4は友人の授乳体験から【母乳を与えられず後悔したくない】という気持ちを述べていた。熱心に母乳を与える他の褥婦は母親にとって、自分のモデルや理想の母親像となり、また母乳で苦勞し後悔した友人はこれから母になる自分と同一化し、「参照影響力」を及ぼしていたと考えられる。

#### 4) グループダイナミクス(集団力学)

グループダイナミクスとは、レヴィンによって提唱された理論で、集団になることでその成員個々に齎される力や集団として発揮される力動のことを言う。

事例7は友人たちの集団での授乳の様子を述べていた。また、事例5, 8は【病院の授乳室】【母乳育児という病院の方針】について述べており、特に事例8は授乳に対する考えが変化していた。他の母親が授乳する様子や、またそれを支援する看護職の姿も含めた授乳室での姿勢は、「母乳育児」という集団の目標や価値観を明確にし、グループダイナミクスを発生させていたと考えられる。

### 3. 母親に対する母乳育児支援のあり方

以上の1. 希望する授乳方法, 2. 影響を受けた情

報源、及びその影響力が持つ意味に関する考察から、母親に対する母乳育児支援のあり方について考察する。

#### 1) 授乳室が持つ力

病院の授乳室で他の褥婦が授乳する様子は「参照影響力」となり、またグループダイナミクスが発生していたと考えられた。母乳の確立のためには母子同室による自律授乳が推奨されるが、その一方、個室での授乳は育児の密室化を招く側面も憂慮される。今回の結果から授乳室での授乳はマイナス面ばかりではなく、母親が母乳育児への刺激を受ける機会でもあることがわかった。授乳室は母親同志の情報交換の場でもある。授乳室における集団の力を活用することは、母乳育児への意欲を高め、母親の持つ力を引き出すことができると考えられる。

#### 2) 実母が持つ力

母親が母乳栄養を決意するにあたって、実母の影響はプラスに作用していた。しかし松原<sup>9)</sup> が述べているように、母乳栄養の継続において、実母は適切な支援を行っているとは断言できない。事例2は実母の支援を「有難迷惑」、事例8は「絶対に母乳で行きたかったが…」と述べたように、産褥期という依存的な時期に自立できていない母親は、無条件に実母の方針を受け入れてしまうことも推察される。猪崎<sup>11)</sup> は、実母への教育の必要性を述べているが、近年、実母世代を対象とした「祖母学級」が開催されている。産後の母親の心理的特性や母乳育児支援について、実母へ知識や情報を提供することによって、実母は正しい知識を持つことができる。それによって「専門影響力」や「参照影響力」を有効に発揮することが期待できると考えられる。

#### 3) 看護職が持つ力

看護職からの保健指導は、母親に「専門影響力」として働くが、受け手によっては「正当影響力」として受けとめられる可能性もある。授乳方法は、母親の意志・就業・疾病・乳房のトラブルなど個人の身体的・精神的・社会的条件によっても異なる。これらのことを考慮し、その時の対象者にあった保健指導の方法が必要である。今井<sup>9)</sup> は影響手段の適切性として①受け手への配慮(受け手に悪い印象を与えない)②対人関係の維持(人間関係を損なわない)③不安の喚起(受け手の居心地の悪さや不安感を高めない)等をあげている。母親達が述べているように、看護職は信頼されている専門職である。不安定で変化しやすい母親たちの心理やニーズに配慮した母乳育児支援によって、看護職による良好な「専門影響力」が働くものと考えられる。

#### 4) 母乳育児の継続にむけて

対象者の全員が【母乳のメリット】について述べ、それは母乳栄養を決心することに影響を及ぼしていた。しかし母親達が【母乳のメリット】を理解していても、それだけで母乳を継続することができるとは限らない。母乳育児が成功し継続するには適切な支援が必要である。事例6は“退院後の期待はずれの泌乳量”について述べていた。多くの施設が妊娠中から乳房・乳頭の観察や母乳育児に対する支援がなされている。しかし分娩後の母乳についての情報提供は少ないため、母親は分娩後の母乳に対するイメージができていないことが推察される。このことから、分娩後の母乳育児に関する知識や情報を提供し、母親の心理的準備を促すことも必要であると考えられる。また母乳の確立には個人差や個体差がある。今回の研究では、1ヶ月健診時の栄養方法は9名中4名が混合栄養であったが、母親への適切な支援によって、1ヶ月より遅れて混合栄養から母乳栄養となることは、十分におこり得ることである。また、母乳分泌量が十分であっても、母親は母乳不足感から、人工栄養を付加していることも考えられる。瀬戸口<sup>12)</sup>は混合栄養になった理由として、母乳不足・母乳不足感・疲労・乳房・乳頭トラブル等を報告している。以上のことから、退院後の母親達には母乳育児支援グループによる支援や、医療施設や公的機関による電話訪問・家庭訪問・母乳外来でのサポートの必要性が高いことが推察できる。それは母乳を与える回数を増やし、母乳育児の期間が延長し、ひいては母乳栄養率の向上につながると考えられる。

日本の里帰り出産の高率さが示すように、退院後や自宅での母親を取りまく公的支援体制は充実しているとは言いがたい。母乳育児中の母親は頻回の授乳のために疲労し、また外出もままならず孤独感に陥り易い。母乳育児支援のみならず育児の孤立化を防ぐ意味でも、組織的な支援が必要である。

Raphaelら<sup>13)</sup>は、「親の哺育法は経済的要素、社会的要素、人口統計的要素など多くの複雑な影響を受けている。」と述べている。母親には乳児の栄養方法を選択する権利があり、母乳栄養は強制されるものではない。しかし、先行文献<sup>2) 3)</sup>や今回の研究で明らかであるように、大多数の母親は完全母乳ではなくとも、「できるだけ母乳で育てたい」と考えている。「専門影響力」「参照影響力」が母親達を母乳栄養へ動機づけるように母親のニーズやタイミングに合致した人的資源や社会資源を活用することによって、母親達への母乳育児支援は可能であると考えられる。

## VI. 研究の限界と課題

本研究は、授乳方法に関して母親に影響を与えたものとして、あらかじめ選択枝を提示した。そしてその中から影響が強かったもの上位2位を選び、それに関連した半構成的面接を行った。よって提示した選択枝以外にも、影響を受けたものが存在する可能性もある。また支援を与えた側からの情報は得ていない。岩井ら<sup>14)</sup>は「実母の授乳経験が娘の授乳方法に影響する。」と述べている。今後の課題は、実母側からの調査により、実母自身の授乳体験や産後の支援への思いを探求することである。

## VII. 結論

1. 母親が影響をうけた人として、看護職、実母、友人、雑誌・本（の著者）があげられ、その影響力は「専門影響力」「正当影響力」「参照影響力」であると考えられた。受けた影響の主な内容は【母乳のメリット】に関することであった。
2. 様々な影響力を有効に活用することは、母乳育児支援に有用であると考えられた。

## 謝辞

この研究を行うにあたりご協力を頂きましたお母様方、ならびに調査場所を提供して頂きました施設長様はじめ、看護局の皆様へ深く感謝いたします。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課：母子保健の主なる統計，母子保健事業団，2001
- 2) 永山美千子：日本における母乳育児運動，周産期医学，32（増刊号），744-750，2002
- 3) 永山美千子：赤ちゃんにやさしい病院「Baby Friendly Hospital」助産婦雑誌，56（4），55-61，2002
- 4) 今井芳昭：影響力を解剖する，福村出版，1996
- 5) 鎌田久子他：日本人の子生み子育て-いま・むかし-，勁草書房，2000
- 6) 松原まなみ：母乳育児をしている家族の生活，中西睦子監修，堀内成子編著，母性看護学，130-137，建帛社，1999
- 7) 丹羽洋子：今どき子育て事情，ミネルヴァ書房，1999
- 8) 柳川真理：周産期保健指導に関する一考察，香川母性衛生学会誌，3（1），32-44，2003
- 9) 北村琴美，無藤隆：成人の娘の心理的適応と母娘関係：



- 娘の結婚・出産というライフイベントに着目して，発達心理学研究，12（1），46-57，2001
- 10) Reva Rubin：母性論，医学書院，1997
- 11) 猪崎聖子：出産後3ヶ月までの母乳栄養促進の諸要因の検討，母性衛生，40（2），237-243，1999
- 12) 瀬戸口希根：産後1ヶ月健診までの母乳栄養確立阻害因子，浜松労災病院学術年報，19，131-135，2002
- 13) Dana Raphael, Flora Davis：母親の英知，医学書院，1991
- 14) 岩井弥生，川由京子：実母の母乳育児意識と褥婦の混合栄養育児移行との関係，助産婦雑誌，55（6），538-544，2001

### 参考文献

- 1) 橋本武夫監訳：母乳育児の文化と真実，メディカ出版，1999
- 2) Marsden Wagner, WHO 勧告にみる望ましい周産期ケアとその根拠，メディカ出版，2002

### 要 旨

第1子を分娩後，約1か月経過した母親9名に①希望した授乳方法，②母乳育児の継続あるいは断念の過程に影響を与えた人物，③情報の内容と受けとめについて面接法による調査を行った。その結果，母親全員が母乳栄養を希望しており，授乳や母乳への価値観について影響を受けたものは，看護職と実母が多く，友人と雑誌・本がそれに次いだ。看護職による保健指導や，実母の授乳体験と授乳に関する価値観を通じた影響力は，母親が母乳栄養を希望し継続する動機となっていたと考えられた。

キーワード：価値観，母乳育児，影響